# さかまた

生物の豆辞典　1973・12　No. 4

## ◎アオウミガメを放流しました。

10月は鴨川シーワールドのオープン３周年にあたり、それを記念して10月中に入園の子どもさん5000人に海獣バッヂをプレゼントしました。

また館内では「イルカと三つの夢」と題する特別展示をお目にかけ未来の海洋開発に活躍するであろうイルカの楽しい姿をパネル、オシログラフなどでえがき出し、多くのお客様に深い感銘を与えました。

11月４日には３周年記念行事の一つとして計画していたアオウミガメの放流を行ないました。鴨川シーワールドで１ヶ月から３年間飼育していた４頭に標識をつけ彼等の故郷に返してあげました。

これは彼等がどのような経路で日本の沿岸に近づいてくるものか全く知られていないので、その研究に役立ってくれることを祈って海に放したわけです。彼等がどこかで見つかれば、日本の海ガメの研究の中心である姫路水族館に連絡をとるよう標識に記しておきました。

旅立ちには会員の川瀬明君と一般のお客様のなかから及川雄司君（市川市・８才）、橋山智さん（東京、８才）の３人に浦島太郎さんになっていただき、お酒をかけてお別れのご挨拶をしました。

（動物友の会の
おともだち）

海岸の砂の上におかれた彼等はやがてゆっくりと海に向って動き出し、その後に浦島太郎さんと飼育係員が付添って波打際まで送りました。この感激のシーンを取材にきた大ぜいの報道関係者や、少しでも近くで見たいとカメの周囲にかけ寄って見物人は波でズブヌレになって大騒ぎでした。

波の間に間に頭をみせながら沖へ遠ざかって行く彼等を、その日まで手塩にかけて育ててきた飼育係員たちは「元気で育ってくれよ……」と祈る気持ちで見送っていました。

また係員のその気持が通じるのでしょう。500人ものお客様が砂浜に立ちつくして海の彼方をじっと見つめていました。

カメ君達の航海の無事を祈っています。

## 昭和48年　鴨川シーワールド５大ニュース

**１．皇太子ご一家お成り**

３月24日　紀宮様の幼稚園ご入園前の社会見学として両殿下、礼宮様、紀宮様がおみえになりました。鴨川シーワールド独特の海獣ショーを楽しまれた後、電気・機械施設のご見学、研究室でのご勉強、またご自身でさかなに餌を与えられるなど楽しい半日をお過しになられ、宮様方はシャチなどのおもちゃを両手いっぱいにお抱えになってニコニコ顔でお帰りになられました。

**２．ラプラタカワイルカ学術調査に参加**

１月初旬から２月初旬にかけて、東京大学海洋研究所の学術調査隊が南米ウルグアイで今日まで未知であるラプラタカワイルカの生態その他の調査を行ないました。この機会に、当社からも鳥羽山水族館長、長崎・平塚両社員の３名がこの珍種捕獲の為同行、学術研究上大きな貢献をしました。

**３．シワハイルカ出産**

６月３日　飼育中のシワハイルカの「ブレダちゃん」がマリンシアター水槽内で女児を出産しました。この種の出産が水槽内で行なわれ、その様子を観察・記録したのは日本で初めてであり貴重な資料を得ることができました。

**４．鴨川シーワールドオープン三周年**

昭和45年10月１日オープン以来、満３年を経過しました。10月中は入園のお子様に海獣バッヂをプレゼントしたり、館内では「イルカとの三つの夢」と題する展示により未来の楽しい海の利用について解説し、多数のお客様に広く深い知識を得ていただきました。

**５．珍獣の到着**

４月２日　南米ペルーから「オタリヤ」が１頭、また10月17日、同地から「ミナミアメリカオットセイ」１頭が空輸され、元気で鴨川シーワールドの動物の仲間に入りました。目下調教の特訓をうけています。

## 表紙説明

**シャチの尾ビレ**

鯨の仲間には、魚と違って体に水平な尾ビレがあります。この尾ビレは、上下に速く動かすドルフィンキックにより、ハイスピードで泳ぐことが出来ます。シャチの尾ビレは、普通のイルカ達の尾ビレが、体の長さの$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{5}$の巾をもっているのに比べ、特に大きく$\frac{1}{3}$の巾をもっています。尾ビレの大きさは、スピードと関係があります。シャチは、この大きな尾ビレを動かすことにより、最高スピード60km/hで広い海洋をかけめぐっています。

海の王者シャチ
(西脇昌治「鯨類・鰭脚類」より)

体長6.4ｍのシャチの第１胃（2.0×1.5ｍ）に、イルカとアザラシ各13頭ずつの遺物がみられた、14頭目のアザラシが咽頭のところにひっかかっていた。　シュライバー「鯨」より

## 「シャチ」は 本当に獰猛か？」

シャチという動物は、大きな鯨をもおそって喰べてしまう獰猛な海獣であることを、ものの本や話しで見聞していることと思います。

よって今回は、このシャチがなぜ獰猛であるといわれるのか、又、ほんとうに獰猛な海獣なのかについて調べてみました。

シャチが大変獰猛な動物であるということはそうとう古くから知れ渡っていたようで、古代ローマ時代のプリニューという人は、「シャチは残忍な歯で武装した巨大な肉のかたまり、という以外にうまく表現されたことも記述されたこともない。」と、いうような言葉を残しているほどです。又、現代でもアメリカ海軍の潜水の手引書などにも「シャチは無慈悲で残忍な動物で、あらゆる海域で見られる。

シャチは、３頭から40頭ぐらいの群を作って、他の温血の海獣を食べている。もし、シャチを見たら、潜水者はすぐ水から上がらなければならない。」と書いてあります。

では、どうしてこのようなイメージをシャチが人間に与えたのか？　その理由は、どうやらシャチの並はずれた貪食ぶりと、その食べ方や餌となる生物の種類、そしてシャチの体形などから総合的に「シャチの獰猛さ」が、出ているようです。

良く大食のことを「鯨飲馬食」などと表現されますが鯨の仲間のシャチは、まさにその表現通りの大食漢でありましょう。シャチは、餌となるものなら何でも大きな口で食べてしまいます。貪食の例は、1862年にデンマークのエシュリヒト博士が調査したところによると、体長７ｍ未満のシャチが、第一胃（イルカ類には胃が４つある。）の大きさが、タテ２ｍ×ヨコ1.5ｍほどでその中に何と、ネズミイルカ13頭、アザラシ13頭の遺物を見い出し第14番目のアザラシの死がいが、そのシャチの咽頭の中にあったというほどです。又、ベーリング海で捕獲された例では、その胃袋にはアザラシの遺体32頭分の遺物が入っていたとか、ソ連では１頭のシャチの胃から仔オットセイ60頭分を発見したなどという報告もあるほどです。

しかし、調査されているシャチが全てこんなに食べていたわけではありませんが、このような例からもいかに大食漢かがうかがわれます。

シャチの餌は又、多種多様で、日本近海の調査でも、タラ、カレイ、ヒラメ類、イワシ、サケ、マス、マグロカツオなどの魚類やイカの類、そしてイルカやクジラ類も含まれます。

このほか、オットセイ、アザラシ、大きなサメなどが胃から発見された例もあります。

外国でもセイウチの仔や海鳥やペンギンも喰べていたという報告さえあります。しかし、氷の割れ目からシャチに狙われたという南極探検隊員のお話は人間の方から見て狙われたと感じただけのものであって、今だかつて人間を喰べていたという例はありません。

シャチが鯨を攻撃する様子を、イギリスのダットレイは、次の様に記しています。

「彼等は何10という群をなして若い鯨をおそい、ブルドックのように烈しくそれを苦しめる。 あるものは尾ビレをくわえてその運動を制する。あるものは頭部にかみつく、ついにあわれな鯨は、からだが熱くなって舌をだらりと外に出す。するとシャチは唇にくいつき、舌にかみつく、そして鯨が死ぬと、彼等は主として舌と頭を喰う。しかし、鯨の体が腐敗しはじめるとそれから離れるのである。」と、又、別の報告者によると、シャチは一番大きなシロナガスクジラさえ襲うけれど普通は、若い個体だけに向っていきますが、時には、30～40頭ものシャチが群をなして、最大のシロナガスクジラに襲いかかること があります。

鋭い歯でこの巨大な動物の唇や胸ビレ、とくにのどや舌にかみつき肉を引きちぎり、出血して死ぬのを待ってその身体を貪り食うというわけです。

シャチは、時として捕鯨船の跡をつけてきて、油や肉を取る為に船腹に曳航している鯨の死がいをもおそって脂肪ののった皮を貪り喰う事もあるといいます。

ノルウェーでは、シャチのことを「油泥棒」と呼んでいますが、まことにうまい呼び名だと思います。こうしたシャチを船乗達が鉄砲などで威嚇しても気にかけないということです。

こうした行動から、外国ではシャチの名称も英名で、「鯨殺し」、ドイツ名で「惨殺者」、ラテン語で「鯨の暴君」などと呼ばれ、海の生物中最も獰猛な動物であると考えられ、海の狼とか大海洋の覇者などという汚名やら名誉をもらっています。

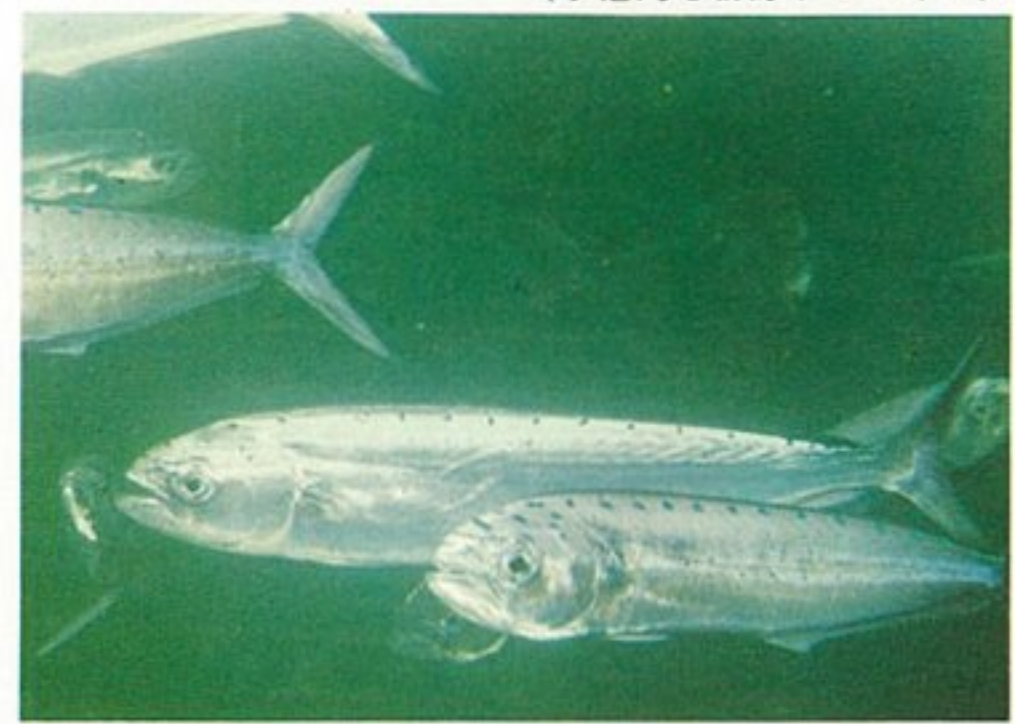
こうしたシャチも近年になるまでは、人間との利害関係もそれほど無かったようですが前述の捕鯨船の話しや、最近の遠洋カツオ、マグロ漁船のシャチ害と呼ばれる綱や網にかかった魚を片っぱしから喰べられてしまったという被害が報告され始め、獰猛なだけでなく、「害獣」のレッテルまではられています。この被害については、どうも、シャチではなく同じ歯鯨の仲間のオキゴンドウのしわざであろうという説もあり、本当だとすれば、シャチにとってははなはだ迷惑な話しです。

このようにシャチの大食漢ぶりや獰猛さはいろいろのお話しとしてつたえられてきましたが、シャチも、陸のライオンやトラ、ヒョウと同じ、海の肉食獣ですので当然その餌となる動物も海棲の哺乳類から魚類などに及んでも不思議はありません。食う為以外にそれらの生物をなぶり殺すというようなことであればシャチは残忍で獰猛だと表現してもさしつかえありませんが、彼らも生きんが為のその捕食行動であるので、はたして、獰猛という表現だけで、シャチの行為をきめつけられるでしょうか？

飼育中のシャチも、時としてイラ立たせたりすると、口を半開して係員に向ってくるようすは、自然海でみせた性格の激しさの片鱗がうかがわれます。しかし、私共鴨川シーワールドをはじめ、各国のシャチを飼育している所で、今だかって人間がシャチに、彼らの餌として見られ、おそわれたことはありません。

このようなことから、シャチに対する見方も変ってきて、獰猛な動物ではないとも考えられるようになってきました。

（清水記）

（水槽内を群泳するシイラ）

## トピックス

### シイラ飼育中！

10月３日にシイラを搬入しました。シイラのことを、鴨川付近ではマンビキ、マンビ(万匹)、トウヒャク、トウヤク（10も100も）などと呼んでいますが、いずれも多く獲れることからつけられた名前です。アメリカでは、泳ぎ方がイルカに似ていることからドルフィン（Dolphin ＝イルカ）と呼んでいます。シイラはカツオやマグロと近縁の魚で、カツオやマグロ同様外洋性の回遊魚です。

水温が20℃以上になる春先より体長１ｍものが、日本近海に産卵回遊し、夏から秋にかけては50cm前後が多く見られるようになり、水温の低下と共に南下して行きます。近年当館を始め各水族館で外洋性の魚を飼育する計画が試みられていますが、当館はその第一歩として、シイラをアタックしました。傷の治療や、餌付けも順調に進みましたが、水槽より飛び出すと云う思わぬハプニングも起こりました。しかし、今では水槽の中でアジを狙いながら、ガラス面すれすれに、ダイナミックな姿で泳ぎ廻っています。

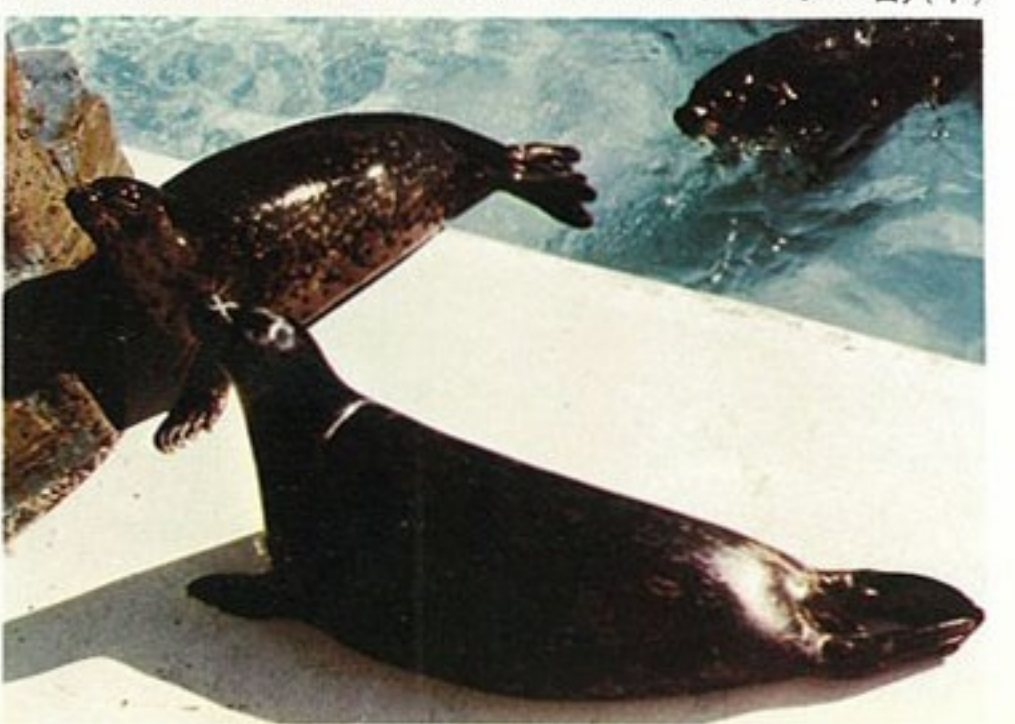
（高鍋記）

## シーワールドのアニマル達

### ゴマフアザラシとゼニガタアザラシ

当館でショーを行なっているのは、ゴマフアザラシと ゼニガタアザラシの２頭ですが、その形態、生態あるいは性格などにはかなり相違があります。ゴマフは普通に飼育されており、飼育生活にもよく馴れる種類ですが性格的に神経質なこともあって、時には新しい環境に馴れるまで１ヶ月位拒餌しないことがあります。それに対しゼニガタは飼育例も稀で、すでに当館に来て１年半になりますが、その間病気らしい病気もせず順調に成長を続けています。性格的にはゴマフよりも温和で、動きはスローモーで、餌を食べるのもゆっくり呑み込み、また他のアザラシとの闘争も殆んどありません。また人間の動き、物音などに対する反応には敏感で、ショーでは先輩アザラシを押しのけて真先に飛び出してくるなど積極的かつ図々しいところがあり、いかにもマイペースといった感じです。ゼニガタは以前はゴマフの一変種とされていましたが、最近の研究によって独立の種であることが確められました。終りに両種の相違を表にしておきます。

（大島記）

（ゴマフアザラシのジャル君とゼニガタアザラシのダン君）(下)

| | ゴマフアガラシ | ゼニガタアザラシ |
|---|---|---|
| 体長 | 雄 180cm | 雄 190cm |
| 模様 | 黒白の集合模様 | 暗色の地に白色リング |
| 分布 | 北太平洋北部沿岸 | 北海道 |
| 生息域 | 流氷域 | 流氷域の外側 |
| 出産 | 氷上 | 岩礁上 |
| 子ども | 体長　平均97cm<br>白いうぶ毛をもつ<br>水に入らず | 体長　平均105cm<br>親と同じ毛並み<br>出生後すぐ水に入る |